

2. 2年保育4歳児事例

西多 由貴江

2年保育4歳児 I期

教師と触れ合ったり、好きな遊びをしたりしながら、幼稚園生活に親しみ安定していく時期

1. キーワード

安心してかかわれる場 ものづくり ものを媒介としたかかわり 身近な素材や教材

2. この事例を選んだ理由 (ナニ2年保育児)

入園当初、2年保育児女児の多くは3年保育児がままごとをして遊んでいる姿を見たり、教師の側で過ごしたりすることが多かった。他園で生活している経験があるものの、なかなかすぐに遊び出すことができずにいた。

そこでまずは、教師が2年保育児とコミュニケーションをとりながら、遊ぶことが大切であると考え、おにぎりづくりを提示した。教師の提示したもの(おにぎり)づくりを通して、幼児らが安心して過ごすことができる場を見つけたり、もの(おにぎり)を媒介に友達とかかわったりすることができた事例である。

3. 事例

事例1 「おにぎり屋さんみたい」

4月30日(木)

1日目。教師がおにぎりづくりを提示し、A児らと一緒におにぎりづくりを楽しんだ。2日目、A児が「先生、おにぎりつくりたい」と、教師の所にやってきた。教師は「どんなふうにつくる」と尋ねると「前みたいに紙を丸めてつくる」と、答えた。そこで教師は「どんな材料がほしいの」と問かけると、A児はしばらく考えた後、「新聞紙と・・・白い紙・・・あとは・・・黒い紙もいる」と、教師が昨日おにぎりづくりの為に提示した材料を思い出しながら答えていた。この日、教師と一緒におにぎりづくりを楽しんだ。

その次の登園日(3日目)の姿である。

A児と教師がおにぎりをつくっていると、B児、C児、N児が加わってきた。しばらくすると、そばで遊んでいたE児、F児がやってきて、おにぎりを1つ持っていった。その後もE児らは、繰り返しおにぎりを持っていった。おにぎりをつくっている幼児らは何も言えないので、教師はE児らに「勝手にとっていったら泥棒になるよ。欲しい時は『ください』とか『貸して』とか言わないとわからないよ」と伝えた。二人はバツが悪そうな表情で聞いていたが、E児はすぐに「ください」と教師の隣にいたA児に声をかけた。A児は教師の顔を見た。

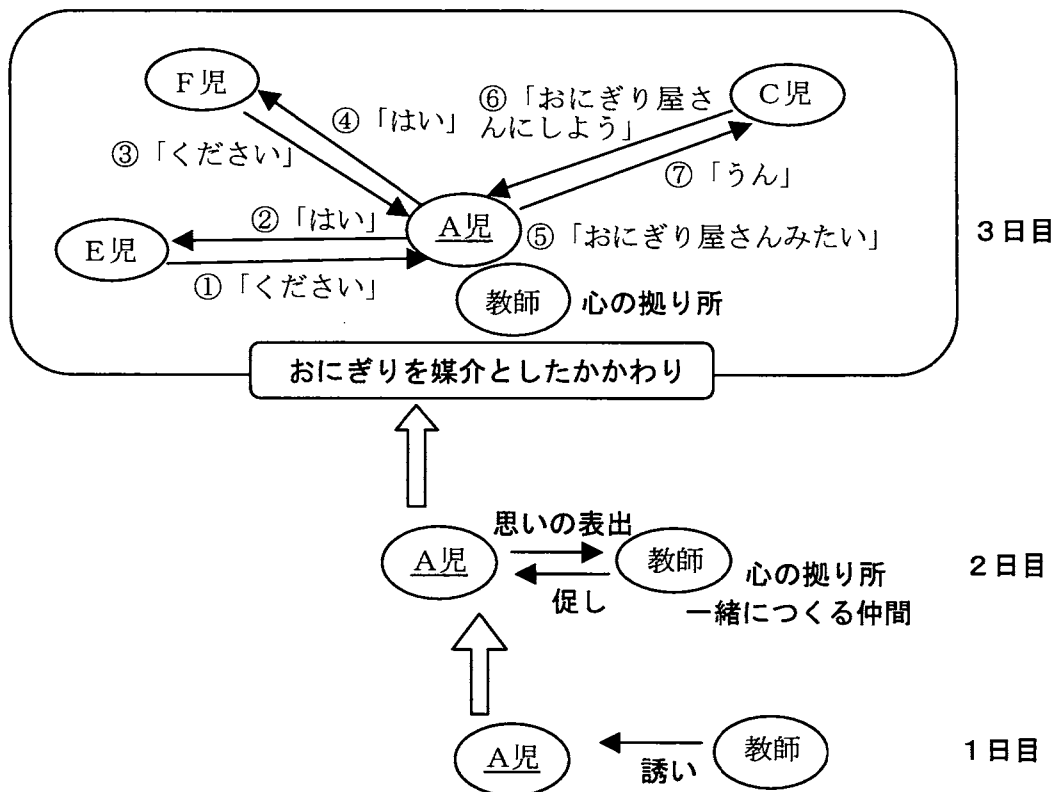
教師 「どうする？」

A児は気恥ずかしそうに顔を真っ赤にして、「はい」とE児におにぎりを一つ手渡した。E児はおにぎりを手にするとすぐに食べる真似をした。F児もE児の真似をして「ください」と声をかけ、おにぎりをもらい食べた。その姿を見て

A児 「おにぎり屋さんみたい」
 C児 「そうだ。おにぎり屋さんにしよう」
 A児 「うん」

その後も、E児、F児をはじめ、周りで遊んでいた幼児らがおにぎりを食べにきた。A児は「あ～、忙しい、忙しい」と言いながらも、繰り返しおにぎりをつくったり、「はい」とおにぎりを手渡したりすることを楽しんだ。

〈教師や友達とのかかわり〉



4. 考 察

(1) この事例からわかる幼児らの学び

①ものを媒介に教師や友達とかかわって遊ぶ楽しさ

A児は教師と言葉を交わし、友達と同じ場でおにぎりづくりを楽しんだ。幼児らにとっておにぎりは身近なものであり、イメージすることが容易な食べ物である。その為、周りの幼児らも、A児らがおにぎりをつくっていることをすぐに理解することができた。そのこともあり、出来上がったおにぎりを媒介に、周りで遊んでいた幼児らと「ください」「はい」と言葉を交わしながら、遊ぶことができた。

幼児らは、おにぎりを媒介に、教師や友達とかかわって遊ぶ楽しさを感じることができたと考える。

(2) 環境の構成と教師の援助

①安心してかかわることができる場

自分からすぐにしたい遊びを見つけないことができないA児にとって、教師を中心におにぎりをつくる場は、安心してかかわることができる場となった。それは、A児にとって教師が身近で、心の拠り所となる存在になっていたからである。教師も一緒に繰り返し遊ぶことを楽しみ、幼児らが安心してかかわることができる場をつくっていくことが大切である。

②身近な素材や教材

新聞紙、包装紙、色画用紙など、幼児にとって身近で扱いやすい素材は、自分の力でさまざまな形に変化させることができるものである。その為、幼児らが自分達で思い通りに形を変え、イメージするものをつくることのできるものであった。

また、おにぎりは幼児らにとってイメージすることが容易な食べ物である。さらに、誰もが共通のイメージをもつことのできる教材であった。そのため、多くの幼児がかかわることのできる遊びとなった。

③思いの表出させる援助

教師は、A児がどのような考えをもっているのか、どんなふうになりたいのかを探るためにも、A児自身が自分の言葉で話すことを願い、声をかけた。教師は幼児の思いを汲み取ってかかわるだけでなく、幼児ら自身が思いを表出することができるように言葉をかけたり、ものを提示したりすることが大切である。

(3) 今後に向けて

- ・今後も引き続き、A児がどのような遊びに興味をもっているか探っていく。また、機会をとらえ、A児が友達とかかわり、思いを表出することができるように援助していく。
- ・入園まもない2年保育児だけではなく、進級したばかりの3年保育児も不安を感じている。2年保育児と3年保育児のどちらもものが遊びに没頭することができる環境を構成していく。



2年保育4歳児 II期

周囲の人や身近な環境への興味や関心が広がり、自分の遊びを広げていく時期

1. キーワード

楽しかった遊びの再現 思いと力量の違い 安心して頼ることができる教師

2. この事例を選んだ理由 (トマエ2年保育児)

1学期、5歳児が中心となってマルチパネを使っていた。2学期に入り、4歳児もマルチパネを使いたいと思うようになった。そこで、マルチパネの設置場所を4歳児テラスに移し、4歳児が中心となって使うことができるように考えた。しかし、使い始めた当初は組み立て方が分からず、教師の力を必要とすることも多かった。

この事例は、教師と一緒にマルチパネを組み立て、忍者の基地やままごとの家をつくって遊んだ数日後の姿である。友達や教師と一緒に遊んだ楽しかった遊びを再現したいと挑戦するものの、うまくいかず、悩みながら自分達の居場所をつくっていく姿である。

3. 事例

事例2 「H児ちゃんと前つくったみたいのつくりたい」

9月18日(金)

数日前から保育室にマルチパネを運び入れ、家づくりをしていた。前日もT児、H児、K児、N児、G児らが、教師の力を借りながらマルチパネで居場所をつくり、お姫様や忍者、アニメのキャラクターなどに変身して過ごしていた。

この日もT児が「先生、(マルチパネの家) つくってもいいの?」とマルチパネの設置してある方を指さして教師に声をかけてきた。教師が頷くと、すぐにつくりはじめた。しかし、しばらくするとT児は怒ったような、困ったような表情でやってきた。

T児 「先生、手伝って」

教師が見に行くと、K児、N児も一緒につくっていた。4枚のマルチパネを組み合わせていたが、斜めになっていた。K児、N児はにこやかな表情で教師を見た。

教師 「あら、できてきてるじゃない」

T児 「いやや。まっすぐがいい」

その言葉を聞いてK児、N児は少し困った表情になった。

教師 「そうか、T児ちゃんはまっすぐにしたいんだ」

K児はしばらく考えた後、マルチパネを指さしながら、「わかった。こっちをはずして、こっちにつけたら」と、自分の考えを伝えた。

その言葉で、3人はもう一度やってみたが、今度は反対側に傾いた。

T児 「まっすぐがいい。H児ちゃんと前つくったみたいのつくりたい」

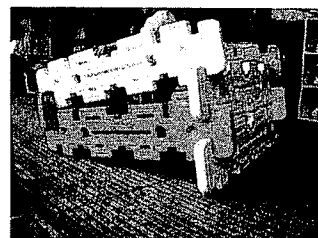
教師 「昨日の家みたいにしたいんだね」

K児 「ここ(二つの家の間)に渡る所とかあったよ」

N児 「(他にも)滑り台とかね」

T児 「先生～、まっすぐにしたい」

そこで、教師も加わり、まっすぐな家になるように一緒に考えた。教師はなんとかT児ら



自身で気が付いてほしいと願い、具体的なつくり方を示さずT児らの様子を伺っていた。そこにL児、養護教諭がやってきた。L児は「どうしたの」と、声をかけた。

K児 「まっすぐにしたいんだって」

L児 「俺、手伝おうか」

L児も加わり、マルチパネをはずしたり組み合わせたり持ち上げたりずらしたりと、何度かやってみた。教師も一緒に悩んでいた。その様子をそばで見っていた養護教諭は「遠くから見たら、わかるんじゃない」と声をかけた。

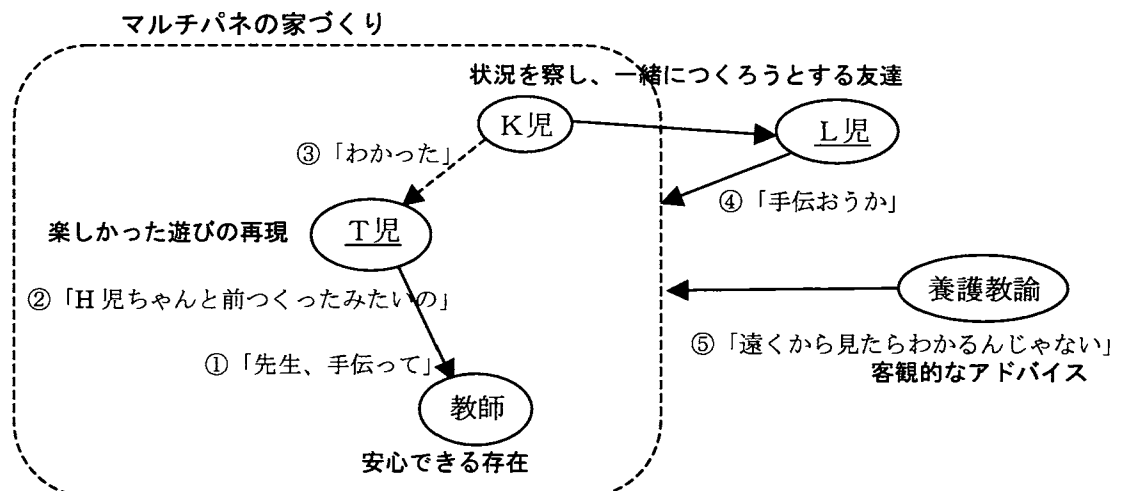
K児、L児が少し離れた所に移動した。

K児 「わかった。こっちの下につければいい」

T児 「私、(マルチパネ) もってくる」

L児、K児、N児がマルチパネを持ち上げ、T児の運んできたマルチパネを下から組み合わせさせた。家がまっすぐになると、「やったー」と声をあげて喜んだ。

〈教師や友達とのかかわり〉



4. 考 察

(1) この事例からわかる幼児らの学び

①楽しかった遊びの再現

T児は友達と一緒に遊びたい思いをもっていたが、自分の思いが通らないと怒って相手にせまったり、なんとか自分の思いを押し通そうとしたりすることがあった。また、思いが通らないとわかるとすぐにその場を離れて違う遊びをする為、じっくり1つの場にいる姿はみられなかった。しかし、マルチパネの家づくりを通して、T児は友達と一緒に自分の居場所をつくり、友達と同じ場を使って遊ぶ楽しさを感じることができた。その為、この事例で「H児ちゃんと前つくったみたいのつくりたい」と、楽しかった遊びを再現しようとしたと考える。

②思い通りにならない経験

T児は、昨日友達と一緒に遊んだマルチパネの家と同じものをつくりたいと思い、実際につくり始めるが、自分の思っている形にすることができなかった。「やりたい」「つくり

たい」という思いがあっても、マルチパネのように大型の遊具は一人ではなかなか思うように扱うことができなかつた。思っているだけでは、思い通りにすることができないことがあることを知る機会となつた。

③育ちが異なる幼児らが一緒に遊ぶ経験

教師がI児に誘われて場に加わつたことで、周りの友達も興味をもちかかわつてきた。しかし、2年保育児のI児は、友達とかかわる姿はほとんど見られず、教師に対して声をかけたり、助けを求めたりしていることが分かる。それに対して3年保育児のK児は、状況を見ながら場に加わり、I児のやりたいと思っていることを推測しながら、行動している。また、L児とも応答しながら遊びの場をつくらうとしている。K児は教師や友達とのかかわりの中で、友達の思いを考え、友達と一緒に遊ぶ経験を繰り返してきたからだと考え。このような育ちの異なる幼児らが一緒に遊ぶことは、お互いを知り合い、経験を広げる場となっている。

(2) 環境の構成と教師の援助

①魅力的な遊具（マルチパネ）

1学期、5歳児が中心となり、マルチパネを自由自在に組み合わせ遊んでいた。4歳児はその姿に憧れ、自分達も使ってみたいと思っているが、思うように使いこなすことができなかつた。そこで、4歳児がもっと自由に使うことができるように、4歳児テラスに設置した。その為、これまで使いたいと思つていても使うことができなかつた幼児らも使い始めた。マルチパネは、5歳児が使っている憧れの魅力的な遊具であつた。

②安心して頼ることができる教師

I児と一緒に遊んでいる友達に自分から声をかけたり誘ったりすることができなかつた。しかし、「先生手伝つて」と教師には助けをもとめることができた。これまでの教師とのかかわりを通して、I児にとって教師が安心して自分の弱さを見せたり、頼ったりすることができる存在となつていたからだを考える。

③客観的なアドバイス（視点の変化）

この事例で養護教諭は一緒につくる仲間とは異なり、全体を通して幼児らの姿を見ていた。その為、少し離れた場所から客観的に幼児の動きを見ることができたと考える。「遠くから見たらわかるんじゃない」と言葉をかけたことで、試行錯誤する幼児らの視点を変化させることになつた。

(3) 今後に向けて

I児が教師だけではなく、友達にも困っていることを話したり、助けを求めたりすることができるように、まずは友達と一緒に遊ぶ楽しい経験を積み重ね、かかわることができるよう援助していく。

自分でやってみたい、挑戦したいと思うことができる遊びや遊び方を必要に応じて教師から提示し、幼児らと一緒に遊ぶことを繰り返していくことが必要だと考える。

2年保育4歳児 II期

周囲の人や身近な環境への興味や関心が広がり、自分の遊びを広げていく時期

1. キーワード

場や自然物の見立て モデル ものを媒介としたイメージの共有

2. この事例を選んだ理由 (ナエ2年保育児)

教師や友達と一緒におうちごっこを楽しむ姿である。教師や友達の姿をモデルに砂や落ち葉などの自然物を料理の材料に見立て、教師や友達と言葉をかわしながら、楽しむ姿が見られた事例である。

3. 事例

事例3 「キャベツ?」「きゃー、ただの葉っぱじゃない」 11月24日(火)

A児、N児が園庭の砂場で料理づくりをして楽しんでいた。A児が「先生、お姉ちゃんになって」と誘ってきたので、教師もお姉ちゃん役になり、一緒におうちごっこを始めた。A児がお母さん役、N児と教師がお姉ちゃん役である。二人は同じ場にいるもののそれぞれに料理づくりをしていた。

A児 「お姉ちゃん(教師にむかって)、お水汲んできて」

教師 「お水がなくなったの。それじゃ、お買い物に行ってきますね」

A児とN児は「行ってらっしゃい」と教師を見送った。教師は水を汲み、落ち葉を集めて戻った。

教師 「ただいま。はい、お水とキャベツを買ってきたよ」

N児 「キャベツ?」

A児 「きゃー、ただの葉っぱじゃない」

教師 「キャベツよ。さあ、お料理しましょう」

教師が「キャベツ炒めをつくるね」と、フライパンに葉っぱを入れて炒める真似をした。二人は教師の様子をじっと見ていた。

N児 「私もキャベツ炒めつくるわ」

N児はすぐそばに落ちている落ち葉を集めて「キャベツがこんなにあった」と、フライパンに落ち葉を入れて、教師の真似をし始めた。

A児 「お姉ちゃん、キャベツ、お鍋に入れて」

教師は「お母さん、おいしいお料理つくってね」と、A児の鍋に落ち葉を入れた。

教師 「他の野菜も買ってこようかな」

N児 「私が買い物にいつてくる」

教師 「じゃあ、大根もお願いします。おいしいお味噌汁が飲みたいな」

N児 「わかった。いつてきます」

A児 「行ってらっしゃい。たくさん買ってきてね」

N児は、落ち葉をたくさん集めて戻ってきた。

N児 「ただいま。キャベツと大根とピーマンもあったわ」

A児 「ピーマンもあったの。たくさん買ってきたね」

教師 「本当にたくさんあるね。一度にお料理できないわね。どうしよう？」

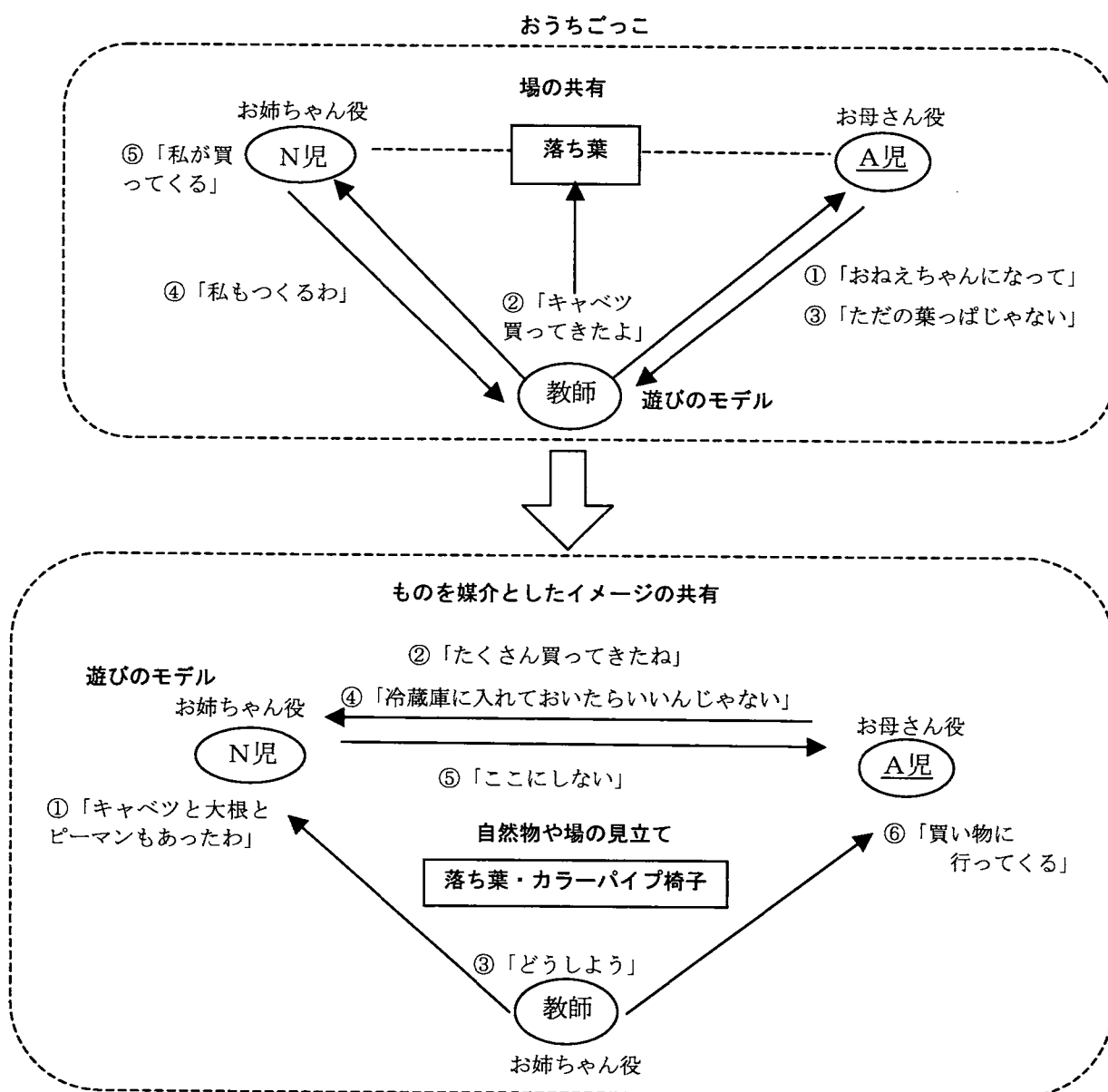
A児 「冷蔵庫に入れておいたらいいんじゃない」

N児 「いいね。冷蔵庫は、どこにする。(周りを見渡して) ここ(カラーパイプ椅子の下) にしない」

A児 「うん、いいね。そうしよう」

次にA児が「買い物に行ってくる」と、買い物に出かけた。その後、3人で繰り返し料理をつくったり、買い物に出かけたりしながらおうちごっこを楽しんだ。

〈教師や友達とのかかわり〉



4. 考察

(1) この事例からわかる幼児らの学び

①見立て遊びの楽しさ

教師は、砂や水だけではなく、自然物を利用して遊ぶ楽しさを知って欲しいと願い、落

ち葉をキャベツに見立てて提示した。最初、N児は「キャベツ？」と不思議に思い、A児は「ただの葉っぱじゃない」と、見立てることができなかった。しかし、教師がモデルとなることで、幼児らも見立てて遊ぶことを楽しむことができた。これは、これまでも教師と一緒に遊ぶ中で、教師の真似をして遊ぶと楽しいという経験を積み重ねてきたからこそ楽しむことができた。

また、幼児らの育ちが、抽象的で偶然性のあるものでも自分達の遊びに取り入れて遊ぶことができる育ちになっていた為、楽しさを感じることもできたと考える。

②友達と同じイメージをもって遊ぶ楽しさ

A児は、教師の姿や教師の真似をして楽しむN児の姿を見ることで、落ち葉を野菜に見立てることができた。自分から教師に「キャベツ入れて」と声をかけ、料理づくりを楽しんでいる。また、A児は、教師の「どうしよう」の言葉に反応し、近くにあったカラーパイプ椅子を冷蔵庫に見立てるアイディアを出した。そのアイディアをN児に受け入れられたことは、A児の自信となった。

この遊びを通して、教師や友達と一緒に、落ち葉やカラーパイプ椅子などの身近なものをいろいろなものに見立て、友達と同じイメージをもって遊ぶ楽しさを感じることができたと考える。

(2) 環境の構成と教師の援助

①身近にある自然物

A児、N児にとって、落ち葉はただの落ち葉であった。しかし、教師が、野菜に見立てたことで、二人にとって遊びに必要なアイテムとなった。幼児らにとって身近な自然物は、何にでも見立てることができる素材である。

②モデルとなる友達

N児は、教師の落ち葉を使って料理をつくる姿をすぐに真似て料理づくりをしたり、買い物に出かけたりし始めた。新しい物事に取り組むまでに時間がかかるA児にとって、N児は憧れのモデルとなっている。A児はモデルとなる友達と一緒に遊ぶことで、新しい遊び方を知り、真似て遊ぶことができた。

③モデルから一緒に遊ぶ仲間に変化する教師

教師は遊び方を示したり、遊びがより面白くなるアイディアを提供したり、幼児らのモデルとなって、遊びをつくっていくことも必要である。しかし、幼児らが自分たちで遊びをつくり始めた時には、一歩引いて遊びの仲間となり楽しむことが大切である。

(3) 今後に向けて

- ・A児が友達に自分の思いを伝えながら遊ぶことができるように、友達と一緒に遊ぶ楽しい経験を積み重ねていく。
- ・教師は幼児と一緒に遊ぶ中で、モデルとなって遊び方を示したり、幼児らがお互いに思いや考えを伝え合うことができるように仲立ちしたり、必要に応じてかかわり方を変化させながら、かかわっていく。

○2年保育4歳児 Ⅲ期

身近な環境への興味や関心が高まり、自分で遊びを深めていく時期

1. キーワード

言葉で思いを伝える必要性 お互いの思いの違いを知り、調整する大切さ

2. この事例を選んだ理由 (1712年保育児)

これまでも繰り返し楽しんできたおうちごっこである。しかし、これまでは気の合う数人の友達と楽しんでいた。また、多くの幼児が場を共有して遊んでいても、それぞれのイメージが異なっていることが多かった。

この事例では、別々のイメージで遊び始めた幼児らが、お互いの思いのズレを調整し、一緒に楽しむことができた事例である。

3. 事例

事例4 「こうしたら入れるよ」

2月16日(火)

A児、T児は表現会でお姫様役が着用したドレスを身につけお姫様になり、C児はお姫様の家にいる犬になって自分達の家をつくって遊んでいた。M児、N児、K児は、表現会で小人役が着用した衣装を着て過ごしていた。小人役のM児らは、お姫様と一緒に遊びたいと思っているが、言葉で伝えることができず、お姫様の家の様子を見たり、そばに行つて様子を伺ったりしていた。しばらくすると、C児がM児らを追いかけて始めた。C児らは教師に「何もしていないのに、C児が追いかけてくる」と訴えにきた。そこで、お互いに話をするように場をつくった。

K児 「C児ちゃん、どうしてつかまえるの」

C児 「だって、A児ちゃんがかまえて言うんだもん」

教師 「A児ちゃんは どうして C児ちゃんに M児ちゃん達をつかまえて言ったの」

A児 「・・・だって、M児ちゃん達が勝手に家に入ってくるかなって思ったから」

M児 「入ってないよ。何をしてるか見てただけなのに」

N児 「そうや」

K児 「K児だって入ってないよ」

A児 「でも、近くに来て、見てたでしょ」

N児 「でも、何にもしてないのに」

教師は、M児らが A児らと一緒に遊びたいと思っていることを伝えようと声をかけた。

教師 「ねえ、もしかして、小人さん達はお姫様の家に入りたくて見てたんじゃないの」

M児、K児、N児はニッコリした。

A児 「えっ、狭いし入れないよ」

C児 「3人 (A児、T児、C児) しか入れないよ・・・」

このやりとりを聞いていた T児はお姫様の家の段ボールの囲いを広げて広い部屋をつくった。

T児 「こうしたら、広くなるから入れるよ」

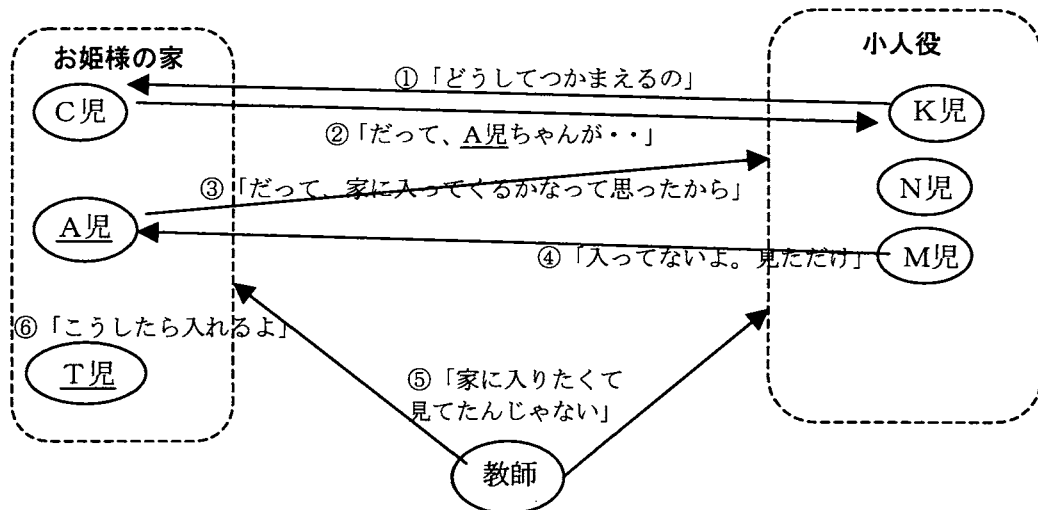
教師 「T児ちゃんは、どうして広くしたの」

T児は、照れたような表情で教師や周りの友達顔を見たが、言葉にすることはできないようだったので、教師が「T児ちゃんは小人さん達が入ってもいいって思ったの」と声をかけた。T児は小さな声で「うん」と答えた。

A児 「じゃあ、一緒に遊ぼう。(小人役3人に)名前決めてね。いいでしょ。」

M児、K児、N児は「いいよ」と、にっこりしてそれぞれに声をあげた。その後6人は、それぞれの役割を決めて、かたづけまでおうちごっこを楽しんだ。

〈教師や友達とのかかわり〉



4. 考 察

(1) この事例からわかる幼児らの学び

①友達に思いを言葉で伝える必要性

幼児は友達の面白そうな遊びに興味をもちかかわりたい思いをもっている。しかし、すでに遊びが始まっている場に後から加わることは簡単ではないこともある。この事例で、自分達の思いを言葉で伝えることで、お互いの思いを知ることができることを学んだ。

②お互いの思いの違いを知り、調整する大切さ

幼児らは友達と一緒に、それぞれの役割を決めておうちごっこを楽しむことができた。それは、自分の思いを言葉で伝えることでお互いの思いの違いを知ることができたからである。また、お互いの思いを調整することで、新しい遊び方を考えることにつながっていった。

幼児らはお互いの思いの違いを知り、自分達で解決する方法を考えることで、一緒に遊ぶことができるということを学ぶことができた。

③友達と一緒に遊ぶ楽しさ

おうちごっこは、これまでも繰り返し楽しんできた遊びである。中でも、A児は自分の役になりきって遊ぶことを楽しんできた。この事例では小人の「名前を決める」ことで、お互いの役割を明確にして、かかわり合うことができるようにした。そのことによって、安心して友達と一緒に遊びはじめることができた。

(2) 環境の構成と教師の援助

①のびのび表現会の衣装（共通の体験）

のびのび表現会（2月11日）で自分達が使った衣装を自由に使うことができるように提示しておいた。練習中には着ることができなかった友達の役の衣装を身につけ、自分の遊びに利用していた。どの衣装が何の役の衣装であるかが幼児らの中で共通理解されていた為、衣装を見ただけでお互いが何の役になっているか知ることができた。幼児らが共通のイメージをもつことができるアイテムである。

②思いを伝え合える場づくり

教師は、幼児が自分の思いや考えを友達に伝えることができるように、話し合うことができる場を設定することが大切である。それは幼児らがお互いの思いを知り、友達と思いやイメージがずれていることに気づくことができるからである。また、それによって新しい遊び方を見つけたり、周りの友達の良さを知ったりすることができると思う。

(3) 今後に向けて

- ・ 幼児が悩んでいることに寄り添い、事実を整理していくことで幼児の思考力が育つ。しかしこの事例では、教師が幼児の思いを汲み取り、幼児よりも先に言葉をかけてしまった。教師は先走ることなく、幼児自身が自分の思いを伝えることができるようにするとともに、幼児が自分達で考えていくことができる時間と場を保証することが大切であったと反省させられた。
- ・ 3学期になって幼児らは、気の合う友達ができ自分達の遊びを楽しみ始めた。自分達の遊びを大切にすることができる場を保証していきたい。



<一年を振り返って>

1. 協同して生活する姿から見えてきた学びについて

(1) 教師や友達と一緒に遊ぶ楽しさ

2年保育4歳児の幼児は、ほとんどの幼児が他園で保育経験がある。その為入園後、以前と異なる園生活を不安に感じる幼児も多い。だからこそ、まずは**教師や友達と一緒に遊ぶ楽しさ**を学ぶことが大切である。**ものを媒介に教師や友達と一緒に遊ぶ楽しさ**(事例1)、**育ちの異なる友達と一緒に遊ぶ楽しさ**(事例2)など、教師や友達と一緒に遊ぶ楽しさは、幼児のかかわりを生み出していく。

2年保育4歳児Ⅱ期になると、友達と見立て遊びをする楽しさや**同じイメージをもって遊ぶ楽しさ**(事例3)、**役割を決めてかかわり合う楽しさ**(事例4)など、友達の存在が大きくなり、友達と一緒に遊ぶ中での学びが見られるようになる。このような教師や友達と一緒に遊ぶ**楽しい経験の積み重ね**が、協同する姿につながる。

(2) 言葉で思いを伝える大切さ

園生活に慣れてくると、友達と一緒に遊びたいという思いをもつようになる。しかし、思い通りに遊びの場をつくることができなかつたり(事例2)、友達に思いが伝わらなかつたり(事例4)する。その為、いつも楽しく遊ぶことができるわけではない。しかし、**思い通りにならない経験**は、友達の思いを知ったり、新しい遊び方を思考したりするきっかけとなる。だからこそ、自分の**思いを言葉で伝える大切さ**を感じることができる。友達とのかかわりを深め、協同して遊ぶようになる為の大切な学びである。

(3) 思いを伝え合い、調整する必要性

幼児が友達と一緒に遊ぶ為には、思いを伝え合い、お互いの思いを知り、お互いに納得し合える遊び方を見つけ出すことが大切である。事例4のように、思いをもっているが、自分の思いを伝えることができない為いざこざになることもある。しかし、思いを言葉で伝えることで**お互いの思いの違いを知り、調整して遊ぶ姿**につながっていく。

幼児の遊びは、一見すると言葉をかかわし、かかわっているように見える。しかし、協同して生活する為には、思いの違いを知り、その違いを調整し合う**経験の積み重ね**が必要である。

2. 環境の構成と教師の援助について

(1) 環境の構成

①安心してかかわることができる場

幼児が安心してかかわることができる場があると、幼児らが集い、幼児同士のかかわりが生まれる。そこには、**心の拠り所となる教師**(事例1)、**安心して頼ることができる教師**(事例2)など、教師の存在そのものも大きな要因となる。

②かかわりを促す素材や遊具

事例1のおにぎり、事例3の野菜は、幼児にとって身近で**共通のイメージをもつことが容易なものである**。また、どちらも幼児が**自分達の手で扱ったり、形を変化させたりすることができる素材**（紙、落ち葉）でできている。その為、幼児が自分達で遊び方を考えたり、同じイメージで扱ったりすることができる。だからこそ、幼児のかかわりを促す環境として有効であるといえる。

一方、マルチパネなど**大型の遊具**は、幼児にとって**魅力的な遊具**である（事例2）。しかし使い方が複雑で、一人では思うように扱うことができない為、教師や友達の力が必要となる。一人で扱うことが困難な大型遊具もかかわりを促す環境として有効であることが見えてきた。

（2）教師の援助

①モデルから一緒に遊ぶ仲間へ

幼児が自分から遊び始めるために、魅力的で安心してかかわることができる遊びの場があることが大切である。そこで、教師が**モデル**となって遊びの場をつくり、遊び方を提示することも必要である（事例1、事例3）。しかし幼児が自分達で遊ぶようになり、遊び方を見つけはじめた時には、**一緒に遊ぶ仲間**となって幼児同士のかかわりを促したり、見守ったりすることが大切である（事例3）。教師は協同して遊ぶ姿を願い、幼児の育ちや遊び方を見極め、幼児同士がかかわり合うことができるように援助することが大切である。

②幼児の思いを自分の言葉で伝えさせる

協同して遊ぶようになる為には、幼児一人一人が自分の思いをもち、表現することが必要である。その為にもまずは、教師に対して**自分の思いを表出**することができるように援助することが大切である（事例1）。一見すると言葉をかけ合って遊んでいるように見えても、思いを相手にわかるように言葉で伝えることができないこともある（事例2、事例4）。そんな時には教師が仲立ちをして思いを伝えたり、幼児同士が自分の思いを伝え合う場をつくったりすることが必要である。協同して遊ぶようになるために、**思いを言葉で伝える**ことはとても大切である。

3. 今後に向けて

2年保育4歳児の幼児は、1年間の生活の中で園生活に慣れ、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じてきた。一人一人の育ちをみとり、育ちに合った援助をしていくことが大切である。また、幼児らが、友達との思いや考えの違いを受け入れ合い、対等な関係を築いていくことができるように援助していきたい。